

日露関係史料をめぐる国際研究集会報告

東京大学史料編纂所では東アジア等における史料収集事業の一環として、ロシア連邦における日露関係史料の調査をすすめている。

二〇〇九年六月二日、サンクトペテルブルグ市からロシア国立海軍文書館ウラジミール・ソボレフ前館長、ロシア国立歴史文書館アレクサンドル・ソコロフ館長らを招き、国際研究集会を開催した。通算八回目となった今回の研究集会は、日本学士院（共催）の日本関係在外未刊行史料調査事業の一環として、東洋文化研究所大会議室で行なわれた。今回の研究集会は二部構成でおこなわれ、計六本の報告があった。第一部は、ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所（旧東洋学研究所）が所蔵する一九世紀初頭のサハリン（カラフト）アイヌとの交易帳簿を取り上げた。初めに、帳簿の「発見」から日露の共同研究にいたるまでの経過を報告した。帳簿は文化二（一八〇五）年の「大福帳」と「簾貸帳」からなり、サハリン最南端のアニワ湾一帯を交易場とし、和人が日本酒やたばこを前もって渡し、その代価として鯨や鯨をアイヌから受け取った記録である。次にワジム・クリモフ教授（サンクトペテルブルグ国立大学・本所外国人研究員）から、東洋古籍文献研究所における日本コレクシヨンの形成過程と帳簿の来歴に関する考察が発表され、帳簿が、一八〇六年にクシユンコタンを襲撃したフヴォストフ（レザノフの部下）らによって略奪されたものである可能性が示された。東俊佑研究員（北海道開拓記念館）による第三報告は、一八五〇年代の余市場所における「帳簿」（林家文書）の形式や記載内容を比較・紹介し、谷本晃久准教授（北海道大学）の第四報告では、「大福帳」に記載された交易物資や、女性アイヌを対象に特化した帳簿である「簾貸帳」の分析結果が披露された。この交易帳簿はサハリンアイヌについて記した最も古い一次史料と目され、全国から参加した専門研究者から活発な質疑があった。プロジェクトでは、今後翻刻史料のロシア語訳も進め、早い時期に史料集として公開する計画である。第二部は、ソボレフ・ソコロフ両氏から、十九世紀後半から二〇世紀の日露貿易関係と両帝国の朝鮮半島政策について、それぞれの文書館が所蔵する日本関係史料の調査に基づく報告がおこなわれた。これまで知られていなかった史料群にも話が及び、活発な質疑があった。

（プロジェクト代表／保谷 徹）

サハリン・アイヌ交易帳簿の「発見」と共同プロジェクト

保 谷 徹

東京大学史料編纂所では、一九九九年に研究グループ（東アジアWG、研究代表者／保谷）を設け、ロシアを含む東アジア所在日本関係史料の調査・収集事業に取り組んだ。

二〇〇二年七月、当時の加藤友康所長らとロシア連邦サンクトペテル

ブルグ市へ出張し、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支部を訪問した。現在の東洋古籍文献研究所である。

同研究所には一九六〇年代に作成された目録が存在し、これを頼りに日本史料とおぼしきものを閲覧調査した。このときわれわれの調査団が

目にした最も興味深い史料が今回取り上げる帳簿類であった。

研究グループでは、その後継続的に同研究所を訪問し、この帳簿類の閲覧調査について要請・協議をおこなった。二〇〇六年十二月、イリナ・ポポワ所長を東京へ招聘し、同研究所が所蔵する東洋写本コレクションについて報告していただくとともに（イリナ・ポポワ「ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支部の東洋写本コレクション」、『東京大学史料編纂所研究紀要』一八、二〇〇八年）、史料編纂所との間で共同研究の実施について合意を得た。日ロ双方が所蔵する史料画像データを交換し、解読・翻刻のうえ、最終的にロシア語に翻訳して史料集として公開する計画である。

二〇〇八年九月、サンクトペテルブルグに出張し、共同研究に関する覚書を締結するとともに、研究対象とする下記史料群のデジタル画像データを交換した。

〔東洋古籍文献研究所所蔵史料〕

A四七：「大福帳」一冊、文化二（一八〇五）年、横帳

A四八：「簾貸帳」一冊、文化二（一八〇五）年、横帳

この二冊はいずれも裏表紙に「久春古丹番家」と墨書され、北蝦夷地（サハリン）のアイヌとの交易帳簿である。①一九世紀初頭（という早い時期）の交易帳簿であること、②北蝦夷地を舞台とするものであることなど、日本国内には類例のない貴重な史料と考えられた。また、何故ロシアに残されたかという問題も調査チームの興味をひいた。記載された年代から考えると、レザノフの部下による日本拠点攻撃の際に接収されたものと推測されたからである。

〔東京大学史料編纂所所蔵史料〕

外二四九：「魯人再掠蝦夷一件」全五冊、文化四〜九（一八〇七〜一八一二）年

日本側から共同研究の研究素材として提供したこの史料は、レザノフの部下であったフヴォストフ、ダヴィドフなどによる蝦夷地襲撃事件を契機にした一連の北方紛争の記録である。事件の処理を担当した幕府大目付中川忠英により、ほぼ同時代的に編まれたもので、一八七七年、中川の子孫から外務省へ寄贈されている。

二〇〇八年一〇月、サンクトペテルブルグ国立大学ワジム・クリモフ教授を東京大学史料編纂所の外国人研究員として受入れ、日ロの共同研究が開始された。交易帳簿については、経済学部図書館の富善一敏氏の協力を得て、一次解読と翻刻をおこなった。現在は帳簿内容の解析を進めるとともに、ロシア語への翻訳作業をおこなっており、今回の研究集会は、クリモフ教授の翻訳作業を支援するための中間報告としての性格をもっている。

今後は、東洋古籍文献研究所の許可を得て、帳簿史料の影印・和文翻刻・露文翻訳をセットにした史料集を早期に刊行し、史料解析の成果を公開していきたい。